

# 草の芽句会たより

NO,97  
28,9,1

秋冷の道傍に建つうちわの碑  
噴水の描く水の輪秋涼し  
節子

唐辛子まっ赤に干して夏終る  
供華に挿す花虎の尾の色やさし  
範子

金みずひきのそよげる道や帯曲輪  
秋草の咲きたる所教えくれ  
純子

城濠に沿ひて細道萩の花  
ひとつつつ事はかどりて秋に入る  
禮子

仙人掌詠むとき母を思ひけり  
移りゆく季の間に萩咲けり  
剋子

道をしへ道を教えて消えにけり  
植木鉢重なるあたり秋の虫  
文子

笹垣の葉先に光る露の玉  
朝涼のすすむご飯の白さかな  
貞子

ほつほつとコスモスの咲き風少し  
夜半覚めて机に向う秋灯  
貞

出席者 氏家 吉崎 馬場 森 小山  
投句者 大黒 真鍋 川原



今日から九月。日射しはまだ強いけれど城山を吹く風はなんとなく秋めいている。いつもの場所に水引草が咲き、白萩がほころび、金水引は鮮やかな黄色に。梢に名残りの蝉が鳴いている。「やっと涼しくなるなあ」「Dさんはまだ体調が悪いんやろか?」「今日は天主閣へ上る元気がないがな」夏バテの身体を労りつつ、観光客を避けて裏道をぐるっとひと巡り。散り残った合歡が夏の終わりを告げていた。歩を止めてしばし季節の移ろいに心を遊ばせる。  
次回は十月六日、秋の城山散策を皆で楽しみたい。